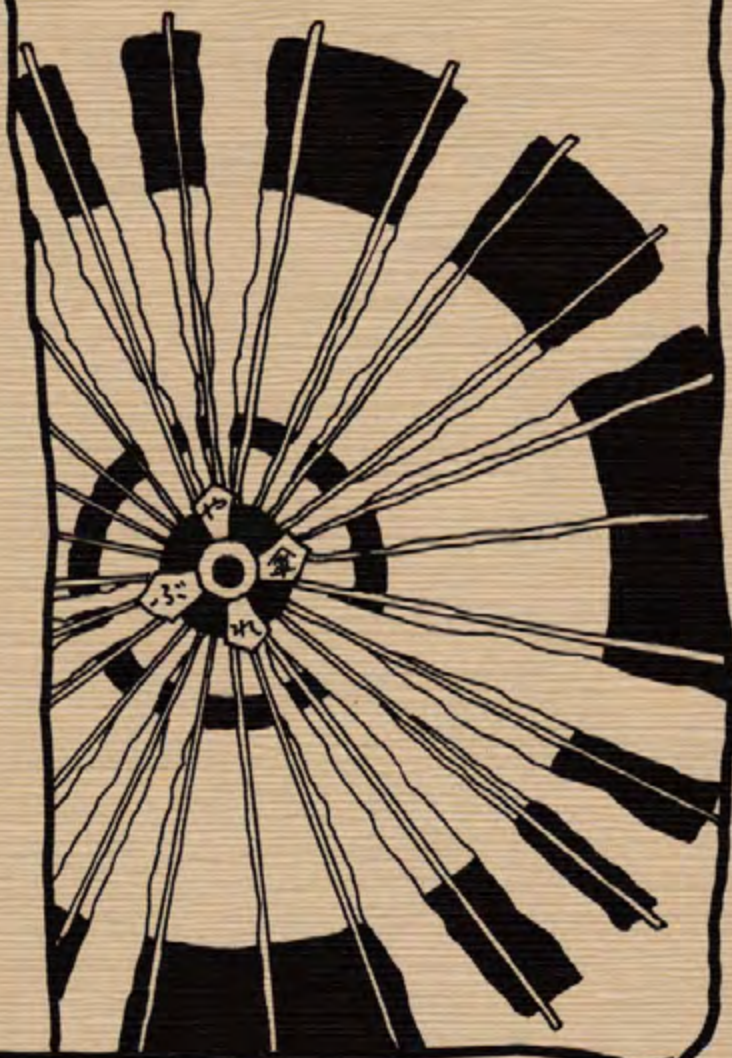


やぶれ傘



九十九号

二〇一七年十二月

すこしだけわきへよりたる冬の蠅 根橋宏次

冬晴れの二階二階モノ干して きくちきみえ

脳みそがほつこりとする暖房車 丑久保 勲

暮れ易し雨が降つたり上がつたり 大島英昭

茶室へと飛び石続く花八手 廣瀬雅男

フルバンドジャズとワインと冬灯 青谷小枝

冬没日すりガラス窓ただ白く 藤井美晴

冬灯自分の足の影動く 小山陽子

今は亡き叔父に献杯にこり酒 瀬島酒望

水仙のひとかたまりが土手下に 白石正躬

境内の木々ながめみる神の留守 渡邊孝彦

東京を淡く沈めて秋入日 安藤久美子

おはじきに夕日のあたる冬座敷 天野美登里

おもむろに鈴の緒をひく神の留守 菊池洋子

ゆつたりと鯉のよりくる水の秋 秋山信行

抄 集 句 傘 れ ぶ や

大 崎 紀 夫 選

野紺菊咲きとほけた顔の土人形 有賀昌子

野分寄す国難問ふてふ総選挙 松村光典

県境をこえてひろがる罌雲 泉 一九

栗こはん零余子をちよつとだけ足して 奥田温子

筆塚の日の差すところ石蕨の花 上林富子

藤は実に自在に姿かへる雲 齋藤朋子

温かきコーヒーにする秋初め 時田義勝

沿道は麴の香りべつたら市 野口希代志

秋祭の司会してゐる同級生 萩原久代

一面の落葉をわける鯉の口 橋本美代

秋祭り声裏返る出店の娘 広瀬 濟

団栗をさくさく踏みて古墳まで 本田 武

敬老の日は老人になりきつて 武藤節子

道端に蝦夷鹿親子バス停まる 森美佐子

草紅葉空き地の隅に選挙カー 湯本 実

十一月

大崎紀夫

境木の向かうは草の花だらけ
鴟の糞厠の窓にやや離れ
犬鳴いてをり吾亦紅暮れきつて
秋蝶はきらりと垣の向かうへと
蛇笏忌は明日アオマツムシは鳴き

雨が降る十一月の校庭に
雲ひとつふたつゆく日の菊枯れて
舟屋まで風まはりくる石路の花
藁屑が田ににほひみる初時雨
櫺紅葉楓紅葉と過ぎて池
昼月は西に銀杏の紅葉散り
紙を漉く手元へ朝日とどきけり

冬の蠅

根橋宏次

初鴨のしだいに混んできたりけり
横抱きにして芋茎の二三束
舟着いてすぐ折り返す蓼の花
魯田のひろがつてゐる鯉料理
ひろげたる卓布に折り目くわりんの実
にはとりに砕く貝がら枇杷の花
川ひろくして真中にかいつぶり
遅れずにバス来てとまる冬木立
雪吊の中の日向にゐる雀
すこしだけわきへよりたる冬の蠅

冬晴れ

きくちきみえ

日曜の朝に台風きたりけり
ずぶ濡れの银杏踏まれまた蹴られ
秋の蚊のテレビの前を過ぎりゆく
風鳴らしつつ紅葉かつ散りにけり
霜月の朝一番のもぐら塚
十一月の鍋釜葉缶より蒸気
徳利の首を越えたる爛の酒
さつきより牡蠣の小さくなる雑炊
幼子と犬は落葉の溜まり場へ
冬晴れの一階二階モノ干して

団 栗

丑久保勲

唐松の林を歩く秋の蟻
鶏頭は貸農園の境ひ目に
銃弾のやうな団栗寺の礎
空港は稔田のなか尾翼見ゆ
車窓より瞼へ秋の夕日射し
土器は遙かな下へ谷紅葉
自動車に照らされにけり星月夜
芸大のカフェで一服秋の雨
火の見とふバス停通過木守柿
脳みそがほつこりとする暖房車

草もみぢ

大島英昭

ひらひらと飛蝗は宙に透きとほり
ゆつくりと雨あがりたる草もみぢ
八つ橋をさかひに右は破れ蓮
どんぐりを撥ねて自転車通りすぎ
十羽ほど初鴨がゐてまた小雨
黄落の中より見やる時計塔
何処に行つても鴨が鳴いてゐる
バス停のベンチ満席散りもみぢ
暮れ易し雨が降つたり上がつたり
八つ橋の木の葉時雨となりけり

花八手

廣瀬雅男

秋晴や猫の来てゐる犬の墓
毒茸ばかり目につく山路かな
吊るし柿富士より高く干されけり
大まかに括られてゐる畑の菊
ななかまど早や閉ざされし避雷小屋
並び行くリュックサクヤ草もみぢ
茶室へと飛び石続く花八手
冬晴れの畑に手押しの耕運機
時雨るるや三人待ちの散髪屋
御巢鷹の山を近くに冬桜

草の実

青谷小枝

子と犬と同じ草の実つけてくる
なんとなく風に草の実投げてみる
銀杏の踏まれつばなし男子校
雁渡し口溶け悪きチョコレート
稲光ロフトに開かぬ窓ひとつ
真鍮のペーパーナイフ秋深む
和菓子屋の壁の能面暮の秋
フルバンドジャズとワインと冬灯
雨の夜の炉の灰に挿すかつぼ酒
ロッカーにコート押し込む美術館

冬
桜

藤井美晴

学校のバザーへ栗を買ひにいく
柿の種すばつと切れてをりにけり
猫が来てきちんと座る後の月
また雨が強くなりけり杜鵑草
秋の蚊がまだゐるバーの椅子の下
銀杏のはじける音がレンジから
冬没日すりガラス窓ただ白く
骨揚げてより冬桜咲く庭に
昼過ぎの日はやはらかく冬桜
枯蓮田向うを長い貨車が行く

冬 灯

小山陽子

秋雨や丁寧に拭くヨガマット
秋灯今宵の指輪ぴかぴかど
黄りんごのねつとりとする肌触り
冬めくや鞆の中でパン曲がる
テーブルを何度も拭かれ冬灯
ハンバーガー作る店主に冬日差
暗闇を近づき来るは落葉なり
コート着るときポケットがチャリと鳴る
外套の予備のボタンをただ触り
冬灯自分の足の影動く

にぎり酒

瀬島酒望

かなかなの声を聞きつつ夜遊びへ
頂きををはるかにしたる紅葉狩
赤とんぼ隣の塀に止まりさう
蛇笏忌のあをさの残る烏瓜
最終のバスすれ違ふ星月夜
十三夜身を横にして通る路地
甘柿を供へて妻の位牌拭く
鳶が去り紅葉かつ散る建長寺
蜜柑山沿ひに線路はカーブして
今は亡き叔父に献杯にぎり酒

水 仙

白石正躬

川原の明るき朝の秋雲雀
山霧や鉄の階段コツコツと
缶ざしの赤のまんまが野仏に
土手に立つ人影に秋深みけり
赤まんま赤城山から風がきて
グライダーを見上ぐれば秋深きかな
屋根へ向けどんぐり放る五つ六つ
枯れきつてほつたらかされ豆畑
湯のたぎる霜夜の茶会も羊羹
水仙のひとかたまりが土手下に

神の留守

渡邊孝彦

森沿ひの芋畑より話し声
秋高し馬は厩で洗はれて
堀越しに見ゆる卒塔婆小鳥来る
待宵や独身寮は真新し
井戸水の満つる溜池杜鵑草
わつしよいのこゑの膨らむ秋まつり
秋簾そば饅頭を売る蕎麦屋
公園の積み肥置場藤は実に
朝寒の坂で見下ろす神田川
境内の木々ながめゐる神の留守

小六月

安藤久美子

東京を淡く沈めて秋入日
小半時歩けば秋の日差し濃く
草の絮小さき旅の始まりに
小六月久し振りなる同窓会
秋茄子の浅漬け午後のダージリン
ズームするレンズに鬼の子のひとつ
七五三もう脱ぎだして着物の子
凍蝶や旅は明日で終る筈
霜柱踏めば気分は巨人めく
綿虫を硝子戸越しに見てゐたり